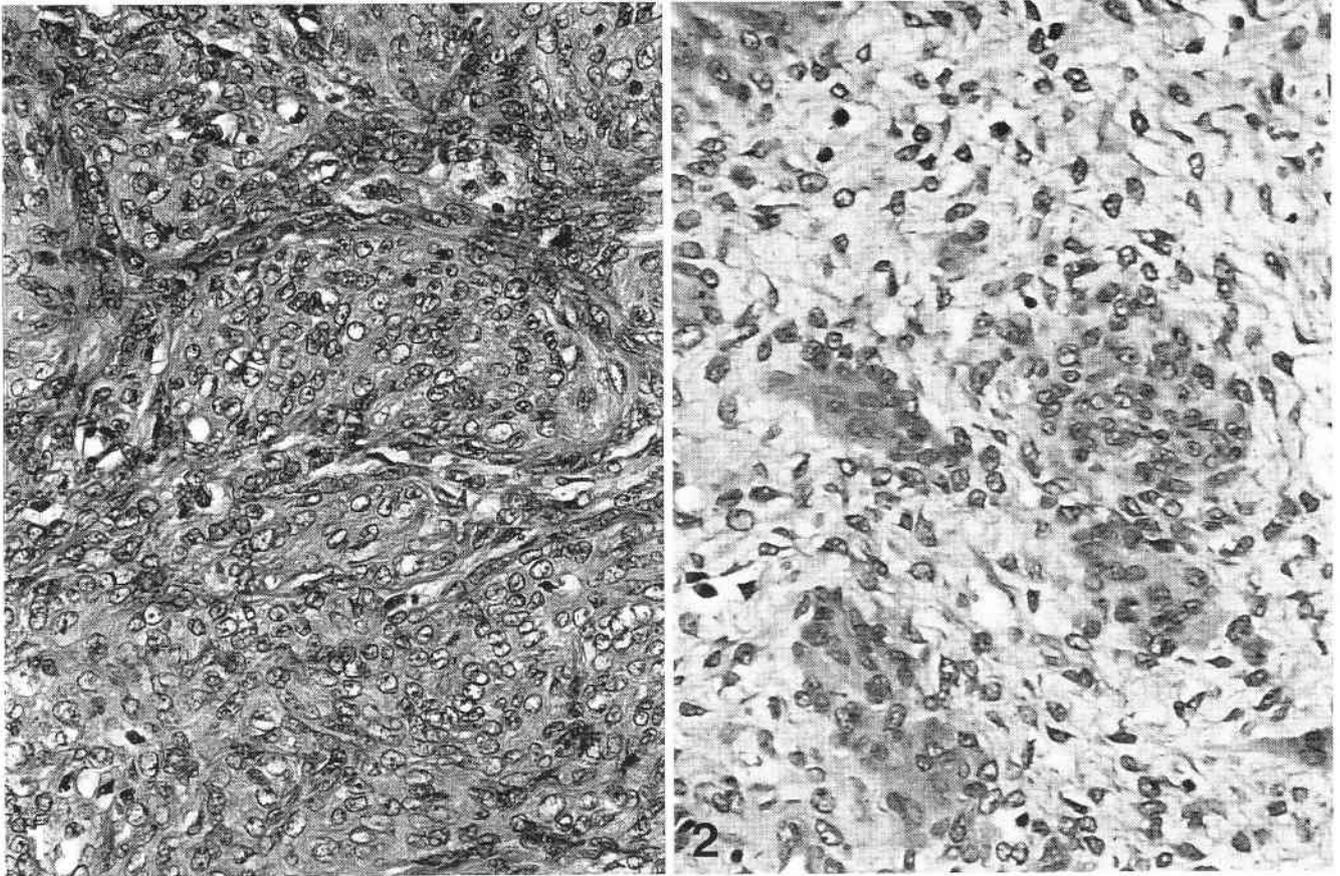


豚の膣

麻布大学・新潟食検出題 第40回獣医病理学研修会標本 No. 774



動物：豚，雌，推定6ヵ月齢。

肉眼所見：膣から一部子宮体部が最大径約10cmと高度に膨大し，粘膜面に3～5cmの硬結感のある灰白色腫瘍が密発，カリフラワー状を呈していた。

組織学的所見：いずれの腫瘍も組織像はほぼ同様で，出血や血管の拡張には部位により差があった。表面は過形成性の重層扁平上皮により覆われ，その直下には水腫性の基質中に紡錘形あるいは星芒状の間葉系細胞が疎に分布していた。同部には血管壁構造が明らかでない，未熟な細胞のみからなる壁を有するorganoid様血管が目立った。更に下方には，腫瘍の主成分である種々の分化度を示す平滑筋系細胞が増殖していた(写真1, HE)。これらの細胞は， α -SMA, アクチンおよびデスミン陽性，ビメンチン陰性で，細胞を取り囲む好銀線維が発達していた(箱入り像)。これらの細胞は，漿膜側では筋束を形成していたが，内腔に向かうに従い，筋束が不明瞭となり，細胞が孤在する部位もあった(写真2, HE)。
考察：以上の所見は，Monluxがヒトのぶどう状肉

腫に肉眼的に酷似する病変として報告した「豚の膣部のembryonal sarcoma」(Atlas of Meat Inspection Pathology. 1972, USDA)のそれとほぼ一致した。しかし，Monluxは未分化間葉系細胞を主成分としているが，本例は，平滑筋系細胞の増殖が主体とする点で異なっていた。

若齢豚の膣部に局限して発生し，主成分である平滑筋系細胞に種々の程度の分化が観察され，これらが漿膜側から内腔に向かって，徐々に分化度が低くなる傾向があったこと，上皮直下にOrganoid様血管を含む未分化な間葉系細胞の増殖が認められたことから，我々はこの病変を非腫瘍性病変で，一種の組織奇形と考えた。

病理学的診断名：「豚の膣のぶどう状増殖を示す間葉系過誤腫」